

## 講義 6 「保存と発展の狭間で イフガオ棚田の試み」

デイヴィッド・レオニデス T. ヤップ (フィリピン大学都市地域計画学部助教授)

### 要旨

イフガオ棚田の特筆すべき点は、人々がコルディレラ山脈の厳しい荒野を生産的な農地に変えたところにある。この棚田は、流域環境、耕作、灌漑用水の分配におけるイフガオ族の高度の稲作技術を示している。過去二千年にも及ぶ棚田の改良と維持を可能にしたのは、イフガオ族の伝統的社会組織並びに稲作文化と宗教的信仰・実践との強い結びつきと言える。イフガオの生活様式は共同体に根ざしており、その指導者に仕え、メンバー同士助け合うことにより、お互いを尊重する心が求められ、培われてきた。

しかしながら、進歩と近代化への欲求はイフガオ族の生活様式を少しずつ変え、棚田の維持を脅かしている。貨幣経済はイフガオの共同体志向を侵し、個人主義傾向を助長している。1991年にフィリピンで制定された地方行政法は、イフガオにおける伝統的社会組織の破壊を招いた。伝統的指導者たちは選ばれた役人にとって代われ、伝統的共同体の境界線と土地所有権についての定義も変えられた。ユネスコ世界遺産に登録されてからは、イフガオ棚田をとりまく状況はさらに悪化した。世界的に有名になった棚田を利用しようと、外部からの観光業、乱開発、投資の流入が活発になった。このような棚田の破壊をくい止めようといくつかの保全対策が試みられたが、それはイフガオの人々に犠牲を強いるものでもあった。

イフガオ棚田の世界遺産認定は、棚田とイフガオ族の将来についての見解を真っ二つに分けたのである。一方には、あらゆる進歩を斥ける保護主義者がいる。伝統のさらなる崩壊を恐れるこのグループは、イフガオを外部世界から隔離し、昔のままに保存することを求めている。他方には、貧しいイフガオ族の経済的苦境を改善し、彼らの生活向上のためには干渉を厭わない「進歩主義者」がいる。干渉の一例として、1ヘクタールあたりの収穫量が高く、二期作が可能な新種の稲の導入がある。しかし、新種の植えつけや刈り入れ方法は、稲作にまつわる伝統的儀式や共同体精神を壊す結果となってしまったのである。

本講義では、これらの相反する二つの見解について考察し、両者の溝を埋めるべく、関係者全員に受け入れられる持続可能な方法を提案したい。